

午前十一時から北元ノ吉祥寺に仕職と、おざあが佐伯
 市から参列した佐伯氏の菩提寺、龍護寺ノ若孫仕職と導
 行として、落慶式が厳肅に執り行われ、ついで瀬川の
 信童庵で祝賀の宴が張られた。祝賀会は和氣おいあいの
 座に型入しく進行したが、北川村長中井平一郎氏の祝辞
 は印象深いものであった。中井村長が今回ノ建築に當つ
 て、終始積極的に協力されたことは、須藤老人クラブ会
 長から承つておつたのであるが、お頭様は北川村の文切
 り文化財であるから、永久に保存顕彰せねばならぬ。こ
 そが故に自分終始協力を惜しまなかつた。参列の皆さ
 らも認識を新左にして、信仰は自由であるが文化財とし
 てのお頭様ノ保存顕彰に協力してほしい。——とハこと
 であつた。

それから、老人クラブの方々の熱意も特筆されるべきこ
 へである。寄附者ノ芳名が社殿ノ前庭に書き出されてい
 たが、北川村を中心には岡市、南浦村、北浦村全域にあ
 らつて、多数の人々から浄財を集めてゐる。寄附者ノ勿
 論惟徳公に關心をもつ人々で、喜んで寄附に志したものは
 であるが、老人クラブの人々が遠ざかるとおす、老の
 災を運んで寄附募集に當つた熱意は日頭の下るものに奇
 つた。

私達は佐伯氏について、鎌倉時代以降四百余年に亘
 つて佐伯地方を統治した領主として、敬慕の情を懐くも
 ちであるが、文録二年十四代准定が伊豫に去つてから、
 佐伯氏と佐伯の地の関係がうすくなり、長い年月と共に
 諸事湮滅し、歴代の墓も定かでないものが多く、祀る人
 もなく哀惜の情を禁じ得ない。
 その中で惟治公は各地に神として祀られてゐる特異な
 存在であるが、其の遺骸を収めた墳墓が、尾高知廟と説
 いお頭様と言ひ、佐伯の人ならは他館人によつて祀られて

いることは奇しきことである。お頭様ノ發端を女才惟治
 の一家臣が、尾高知から惟治公の頭と持ち來つたといふ
 ことは、私はあり得ないことと推するものであるが、そん
 なことはあり得ないことと反論も出来る。しかし靈廟があ
 り参詣者のあることは、それが事實であつたとして次第
 に歴史上に位置づけられることになる。

とは、佐伯の郷土史をさぐる人々が、是非訪ねられ
 ならない史蹟の一つが、瀬川老人クラブの人々によつて
 保存顕彰されたことと、心末の快心事である。
 (おあり)

寺田倫

佐伯史談(第六十六号)を讀んで

宝塚の報誌にて

矢 田

清

終巻

今年は無例年長梅雨で、各地に被害陸續出、然し佐伯地
 方には格別の事も無き様子で、先は日出度と、お慶び申し
 上げます。二十日第六十六号史談誌到着、毎度お手数の
 後深謝致します。今月か、甚南高松生られ名の入会と傳
 へ、史談会も愈々大發展です。

三の丸御殿移築費も現在では四万八千円程集まつ
 た由で(徳壽堂八月十日現在七万五千円)、佐伯の人達もさほどに
 も思つていない様ですが、藩公の私邸が残つてゐるの以
 九州では鹿児島と佐伯位のもので、弁当を完うと会館と
 して各種の会合に使用するといふ事は然るべきです。
 拙歩目録中の餐餐、祥守門札、一丈衆禪堂、二瑠歌録提
 唱、三江湖寺門通場、昔から一丈衆禪堂は見た事なく、
 碧巖録は雪室(セツシヨウ)撰集の禪問答一百則に因縁が注
 ぎ施したもので、雪室は東司(トウジ)即ち便所清掃役であつた為

使所、幸と今雪隠と稱し、然し雪隠ノ音に似せてセツイン
 とは言わすにセツインとつまなふが本當で、支那日本誌
 それ以前に便所ノ設置はなかり、すべてオマルでした。題
 名ノ碧巖は遠藤ハ胡人(トルキスタン)で、眼が青かつた事
 に因り、最初は碧眼録と書きました。左が、後現在の通り碧眼
 録と改めたものですが、別に遠藤ノ言行には関係なく、主
 として唐代各州の有名禪師ノ問答ばかりを集めてこれに
 講評を加えたもので、本著には雪竇と因悟ニ禪師ノ著述
 が重なり、私は漢文ノ勉強にもなると思つてより始に左
 のです。が、漢文は言わすもかまその内容に至つては如
 何なる程度註録も三舍ノ難解で、禪宗は宋代と絶頂と唱
 思つてゐる様ですが、実は唐代を以て最高と致します。

赤木村大庄屋文書 薪式千貳百拾七束、不熟分
 寛 薪式百貳拾四束 價 小麥から三拾七メ 價 大藪竹
 三十二本 價 大根拾八本 大根十八本も珍ですが、大
 藪竹以外はすべて只といふ事になりましよう、當時米一
 升が四十文位でしたから一升四十文一斗四百、一石四千
 即ち一兩、大根は其の^上の四文位、十八本なら七十二
 文かそこら、すると日当にもならぬ様な代価である上、
 この大根は多分卸し大根用でしょう、あまり沢山買ひ込
 んでは古くなるから、必要だけを。二十九 鹿皮は中
 々調達出来ぬから大庄屋小庄屋共に麻疹と稱して額と見
 せぬ、というところでしょう。

(中畧)
 足も殆んど平常と変らぬ様に回復し、左が(編者注
 交通事故に会い四月以来入院)まだ退院とまではゆかず、まあ
 八月一杯はかゝりましようか。

以上 史談 愛媛 旁々
 七月二十日
 久々 敬具
 (お祈り、本稿編集子宛私信ながら、会員の冬号までは、掲載承諾済)

青輪

浪速の津も変りゆく

大阪 木 田 長

暑中が何い申上申す。
 毎月毎月史談会報をいた、たゞ、本当に百難く心からお礼申
 上げます。御究ノ成業も大いに挙がり、心からお喜ぶ申
 します。(中畧)

私達も私達なりに公害ノ多い都会の焼き付く様ならず
 汗かくです。既に昨力も限界に達している初老ノ身に、史
 談会ノ記事と読ませくいたたく事、何にも分り難い清
 涼劑となりませす。故郷を懐い故郷ノ良さを知り、祖先を
 思う、私には何にもかえ難い樂しみ一つでございます。
 私日考える、大阪も昔の十二口と違ひ百八首ノ歌に読
 まれた昔ノ風情はどこにもなく、住み込の岸も沖一里許
 りノ遠くに去り、高師ノ浜は海水浴も不可能な状態、難
 波江ノ芦はまき、胡弓、舞子も最早も水質汚染でこれ又
 昔日ノ影はない。天は二物をよえず、と止むを得ないこ
 とかも知れません。飛鳥王朝の地も住宅で穢れつつあり
 ます。僅かに京ノ祇園祭、十二口の天神祭、住吉祭が地
 方民ノレクレーションの場として昔日ノ面影を止めてお
 ります。本日は住吉祭で約三、四十万人が見物に押掛けま
 す。お神輿も車上と云つた姿です。

二十五日ノ天神祭は天満橋上より拜々まし左が、昔ノ
 船渡御も土佐堀川、堂島川の橋桁が隘路の為くぐれず、
 川下にあつたお旅所まで行けず、川上ノ天満橋と上る形
 となつています。しかし浪速商人ノ鼻息は荒く、威勢の
 よいこと日本一と思おられます。此の日の人出新聞報道で
 は六十万人と云つておられます。(後畧)
 (以上)